



芭蕉句選年考夏之下

芭蕉句選年考夏之下

まほし〜草解の種よりん

天和三年の虚業甚壯部に出る○
草解のまほし〜まほし〜花種はゆまよとけさの親也也
昔は〜まよと妙〜湘〜草のうらよ揚〜まほし〜まほし
日く枕草のまほし〜まほし〜まほし〜まほし〜まほし〜まほし
や〜まほし〜硯のまほし〜まほし〜まほし〜まほし〜まほし〜まほし
ほ〜まほし〜后宮はまほし〜まほし〜まほし〜まほし〜まほし〜まほし
まほし〜まほし〜まほし〜まほし〜まほし〜まほし〜まほし〜まほし
まほし〜まほし〜まほし〜まほし〜まほし〜まほし〜まほし〜まほし
まほし〜まほし〜まほし〜まほし〜まほし〜まほし〜まほし〜まほし

人の世にまほし〜まほし〜まほし〜まほし〜まほし〜まほし〜まほし〜まほし
まほし〜まほし〜まほし〜まほし〜まほし〜まほし〜まほし〜まほし
まほし〜まほし〜まほし〜まほし〜まほし〜まほし〜まほし〜まほし
まほし〜まほし〜まほし〜まほし〜まほし〜まほし〜まほし〜まほし

Handwritten notes in red ink at the top of the page, including the characters "か" and "ま".

Main handwritten text in black ink on page 51, written in a cursive style.

Main handwritten text in black ink on page 50, continuing the cursive script.

Handwritten text at the bottom left of page 50.

首をさしつけられたり

元徳七年冬、東軍も西軍も存続せず、中軍の兵を以てして、大井川に出陣せられたる後、
に、大井川に渡り、大井川に出陣せられたる後、
はるまじく、大井川の西に陣を敷き、大井川の東に陣を敷き、
○はるまじく、大井川の西に陣を敷き、大井川の東に陣を敷き、

重なる事

先づ、大井川の西に陣を敷き、大井川の東に陣を敷き、
元徳七年冬、東軍も西軍も存続せず、中軍の兵を以てして、大井川に出陣せられたる後、

元徳七年冬、東軍も西軍も存続せず、中軍の兵を以てして、大井川に出陣せられたる後、

大井川の西に陣を敷き、大井川の東に陣を敷き、
元徳七年冬、東軍も西軍も存続せず、中軍の兵を以てして、大井川に出陣せられたる後、
に、大井川に渡り、大井川に出陣せられたる後、
はるまじく、大井川の西に陣を敷き、大井川の東に陣を敷き、
○はるまじく、大井川の西に陣を敷き、大井川の東に陣を敷き、

何世の年の花もあはれむらさきもあはれむらさき

紫陽花の情もあはれむらさき

紫陽花の情もあはれむらさき

元福寺の別荘の紫陽花の序に麻の生をよれむらさきもあはれむらさき
うけおれむらさきもあはれむらさきもあはれむらさき
あはれむらさきもあはれむらさきもあはれむらさき
あはれむらさきもあはれむらさきもあはれむらさき
あはれむらさきもあはれむらさきもあはれむらさき
あはれむらさきもあはれむらさきもあはれむらさき
あはれむらさきもあはれむらさきもあはれむらさき
あはれむらさきもあはれむらさきもあはれむらさき
あはれむらさきもあはれむらさきもあはれむらさき
あはれむらさきもあはれむらさきもあはれむらさき

あはれむらさきもあはれむらさきもあはれむらさき
あはれむらさきもあはれむらさきもあはれむらさき
あはれむらさきもあはれむらさきもあはれむらさき
あはれむらさきもあはれむらさきもあはれむらさき
あはれむらさきもあはれむらさきもあはれむらさき
あはれむらさきもあはれむらさきもあはれむらさき
あはれむらさきもあはれむらさきもあはれむらさき
あはれむらさきもあはれむらさきもあはれむらさき
あはれむらさきもあはれむらさきもあはれむらさき
あはれむらさきもあはれむらさきもあはれむらさき
あはれむらさきもあはれむらさきもあはれむらさき

あはれむらさきもあはれむらさきもあはれむらさき

元福寺の別荘の紫陽花の序に麻の生をよれむらさきもあはれむらさき
あはれむらさきもあはれむらさきもあはれむらさき
あはれむらさきもあはれむらさきもあはれむらさき
あはれむらさきもあはれむらさきもあはれむらさき
あはれむらさきもあはれむらさきもあはれむらさき
あはれむらさきもあはれむらさきもあはれむらさき
あはれむらさきもあはれむらさきもあはれむらさき
あはれむらさきもあはれむらさきもあはれむらさき
あはれむらさきもあはれむらさきもあはれむらさき
あはれむらさきもあはれむらさきもあはれむらさき
あはれむらさきもあはれむらさきもあはれむらさき

古文前集長恨歌
王容寂冥淚欄干梨
花一枝春帶雨
杜律海棠春一爰

而美之とあるは、この賦に於て考へるに、
あつたうとく、
哉坊より相おりに、
祖孫の、
此より、
中より、
能勝、
傍物、
止、
の、

存、
後、

元禄六年の、
今を、
坊芭蕉、
は、
は、
集、
と、
其、
雅、

万葉集
有間自

かぬもほくの程し見ゆればくさむをばあひの思ひ
きく推のさし旅人のさし似るといふとぬらさし
推の花のふも似ると思ふ程又出らぬ程にさし
雀籠塞すやうな杜撰な思ふさしは思ひ程にさし
さし〇葉もさしに事やと句解のさしに及まぬ思ひ程に
旅りし思ひ程に推のさしと思ふと推とさし思ひ程に
いひはさしぬ思ひ程にさしとさし思ひ程に思ひ程に
いひ程に又雀籠塞す思ひ程に思ひ程に思ひ程に
己程に思ひ程に思ひ程に思ひ程に思ひ程に思ひ程に
ん又思ひ程に思ひ程に思ひ程に思ひ程に思ひ程に
願塞すハ推の花のさしと思ひ程に思ひ程に思ひ程に

杜撰も思ひ程に又句解の思ひ程に思ひ程に思ひ程に
思ひ程に思ひ程に思ひ程に思ひ程に思ひ程に思ひ程に
思ひ程に思ひ程に思ひ程に思ひ程に思ひ程に思ひ程に
思ひ程に思ひ程に思ひ程に思ひ程に思ひ程に思ひ程に
思ひ程に思ひ程に思ひ程に思ひ程に思ひ程に思ひ程に
思ひ程に思ひ程に思ひ程に思ひ程に思ひ程に思ひ程に
思ひ程に思ひ程に思ひ程に思ひ程に思ひ程に思ひ程に
思ひ程に思ひ程に思ひ程に思ひ程に思ひ程に思ひ程に
思ひ程に思ひ程に思ひ程に思ひ程に思ひ程に思ひ程に
思ひ程に思ひ程に思ひ程に思ひ程に思ひ程に思ひ程に

栗のさしとさしと西のさしと思ひ程に思ひ程に
思ひ程に思ひ程に思ひ程に思ひ程に思ひ程に思ひ程に
思ひ程に思ひ程に思ひ程に思ひ程に思ひ程に思ひ程に
思ひ程に思ひ程に思ひ程に思ひ程に思ひ程に思ひ程に

高川の筆は...
~~~~~

そのくち...  
~~~~~

山形藩と人のこと...
~~~~~

元禄五年に有海...  
○後日記尾伝の部...  
臨王山田氏の事...  
投は高川「松風」...  
○葉には...  
○折...  
~~~~~

年一は...
~~~~~  
三年の入門...  
~~~~~  
~~~~~

大は湖仙亭

付寄...  
~~~~~

本名...
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~


この書は久の...
元禄二年の事

元禄二年の事... 湯屋... 山... 記... 阿闍梨... 山... 花... 古...
元禄二年の事... 湯屋... 山... 記... 阿闍梨... 山... 花... 古...
元禄二年の事... 湯屋... 山... 記... 阿闍梨... 山... 花... 古...

湖... 元禄七年

元禄七年の事... 湖... 元禄七年

夏... 元禄七年... 湖... 元禄七年

元禄七年の事

元禄七年の事

六月... 元禄七年

元禄七年の事... 六月... 元禄七年

元禄七年... 神... 人

元禄七年

元禄七年

面をうらむと云ふと又ハ精海を焼く毎火の焼く事言ふを焼くといふ
いふ二五の詞成たり一をを仕るる面をうらむといふは焼く事言ふを
つゝ今こ

名サ一あつる勢同といふ所の成る所なりと

善くはしむるいふ事なりと云ふは一と云ふは
の本位日序をゆけを言ひしけり

まゝいふといふも川の結ぶ事なり

貞享六年己丑先ニ前年を以て國々々辰のこゝと云ふ○梅
辰の年ハ則貞享六年也元禄改元の事○又見記に梅
といふの事ありと云ふは一と云ふの事なり云ふは貞享の事

の事也と云ふ○己丑先ハまゝいふ事なり○少を言ひしけり
歎ひれといふは成なりといふ事なり○句の事ハ余の言

をばくといふ事なり上の腕を腕

元禄七年の句より又見記元禄八年は初より去るの事阿史の枕
を寝る事なりといふ事なり○又見記に梅の事ハ
何れ相火梅を以てしけり梅の事ハ
山形を以てしけり上の腕の腕は
腕を以てしけり腕の腕は腕を以てしけり
腕の腕は腕を以てしけり腕の腕は腕を以てしけり
腕の腕は腕を以てしけり腕の腕は腕を以てしけり
腕の腕は腕を以てしけり腕の腕は腕を以てしけり

増山井八月ヨナキ 沃枯
棟トミタリ

の形もよく似たものありて其の部に出せしむるに誤りあり○
こゝろのよき其の葉は山菜と似たり其の形も似たり其の味も似たり
やうにもありてワシカセ梅の部の水菜を名著又水菜と云ふは
とも云ふ葉の薄く似たり其の味も似たり又白きモアリ水中に生じ
深し人家の庭に生じ依て生じたり移るるコナキツ水菜ト
言ふるも草で、アリ浮菹ハ秋ナリ碧蒼ナリ不可混同春秋之部
浮菹コナキツ訓ス一名沢枯梗葉ハ葵ノ形ニテ滑ナル取那岐ニ似
タリ其ノ末ヨリ秋碧蒼ヲ祭ラテコナキツ云ナリ水竹ナリ是ラ水菜
ト覺エタル人多シ水菜ハ蒼ナリ蒼黄ナリ○説書ニふらき水
葱ハ大小の気種あり今俗の水菜と云ふ田の中或は田小屋
の中田間の淺水に生じたり其の味も似たり其の形も似たり

むらゝ葉も萎れしむるも光るる和名抄ニ水葱穀水菜
可食和名素木又延喜式萬葉にもある大和本抄にもある田干梅
ワシカセワの洗ハ誤りし事也其ノ奥河と云ふ今に四十年東西北
葛西も似たり其の味も似たり其の形も似たり其の味も似たり
と云ふ向て道のものに村重和との約り控一號の語をたきて
揚の出ても似たり腥臊と云ふ一號の残暑は時々のかきもあ
る○素木に大和本抄、浮菹ニテ國後竹本才十卷に載
るる水菜の書も花葉沢枯梗と云ふ水菜も似たり其の味も似たり
葱姑と云ふも似たり夏秋紫碧花を用ひ堪久可愛和俗山菜
とも沢枯梗とも似たり其の味も似たり

松魚うまのうま。ん成酔ひん

元禄三年のいつを昔系らんころ ○類柑子も何ぞ
○泊叔系も出さ

鎌倉を全くと出きんるのうか

元禄五年の昔の松原に鎌倉のともりやのち支考の東の
す帰る時うたふ事ききくえきやと寝くことき事出
いよかあふれぬ五文字又もくもぬつてはしきききき
く歩ゆきき阿使もみらみすされく自らの微幸よき
海しめんはらうてい生死のけををみく出入きん
福倉の海屋のふれききききき風雅はたふん

生くかあふれと出 鯉の今と武江のふれ屋をけし
世の教おのの眼をききき事けけはるも母も涙を
類柑子かあふれと出 ○古蹟集も何 ○むのふも昔
の松原も何きききき ○泊叔系も出さ

山を山や 翹も何と母垣と

元禄五年の昔の松原もあつ月れは舞うふも清か海も
えきききききききききききききききききききき
何きききききききききききききききききききき
いしてふ翹も何と出さ

あつ入るる海をせし他は○華々に奥の海より上川。
と陸奥より出く山形を水上の基點阜とありしき野
あり板橋山の北と遠く早瀬の海は入るあり山形を東國
田と西○き丸とよみ自らもあつめくありしき
はあつ入るる海をせし他は○華々に奥の海より上川。
と陸奥より出く山形を水上の基點阜とありしき野
あり板橋山の北と遠く早瀬の海は入るあり山形を東國
田と西○き丸とよみ自らもあつめくありしき

湯をむきふちりも回るる水

いつの年の水のつらやまを陸奥郡那須温泉と名をありし日
集三云那須温泉の湯より六里余湯を五つある所のるにあり権現

とん

ハ幡一社に記す林業より聖觀音と云く○湯をむきふちりも回るる水
この湯を林業のり聖觀音と云く○湯をむきふちりも回るる水
されとを記すよはるる水と云く○湯をむきふちりも回るる水
多をたやく名あり○神社考曰山城國男山山下有流号石
清水又同書用成祈水一夜夢一人自北方飛来形如夜叉曰
ハ幡太神令我取天竺白鷺池水来充師之鉢也誰乎答曰
信為諏訪南宮也寤見之清水盈厨加器成得金水乃搗桂窟
寫般若經○雪丸温泉大月野の洋敷よりハ幡宮と云く
まうてあつ一方にありしき

岐阜山

城跡や古井の清ら先見

後美貞享五年

何處のこゝも後日就中
○流取系... 山陰や身を... 又は及阜の城を慶長五年中納言秀信... 城跡... 古井... 清ら先見

秀信の織田信長
三男重名三信卿丸

わがよみ傳... 泉と... 人の...

清庵の山波よせ

何しの... 元福四年... 〇流取系... 野... 〇梅...

元福三年の秋使
あき秋の月
一品

似鳩是也
子子解世
りててててて
まてあてあて
ほてててて

消るほてあてあては集元福二年の事とて世成の序とて書きたる
姓身内なるも元福元年の事とて二日の夏ハス世成妻列り御
母くあてあてはあてあての國に在りて自ら書きたる事とて元
福元年の事とて考る時ハはあてあて人の事元福元年の事とて又元福四年の
事とてあてあての事とて三回忘元福三年の事とてあてあての上言はれ
あてあてあてあて三回忘とてはあてあての事とて元福元年の事とてあてあて
傳る事とて元福中の事とてあてあて

晋陶明とてあてあて

窓ぬるるを窓の事とてあてあて

集元福五年の事

元福七年の續後義とてあてあてもあてあてとてあてあて○古文陶淵

新式并の事

明歸去來辭曰倚南窓以寄傲審容膝之易安園日涉以成趣門
雖設而常關策杖老以流憩時矯首而游觀雲無心以出鳥倦飛
而知還下畧 ○新式并の事とてあてあてとてあてあてとてあてあてとて水
波藻等の指をてあてあてとてあてあてとてあてあてとてあてあてとてあてあてとて
あてあてとてあてあてとてあてあてとてあてあてとてあてあてとてあてあてとてあてあてとて
あてあてとてあてあてとてあてあてとてあてあてとてあてあてとてあてあてとてあてあてとてあてあてとて
清風颯至自謂羲皇上人○赤美子とてあてあてとてあてあてとてあてあてとてあてあてとてあてあてとてあてあてとて
あてあてとてあてあてとてあてあてとてあてあてとてあてあてとてあてあてとてあてあてとてあてあてとてあてあてとてあてあてとて
七文字とてあてあて

野竹真

あし

野水新宅

海一と成る海の多きみち拾遺記

削りけ糸いふ考述

元福七年の夏江戸よりゆりやうとて野水新宅の事あり
海のこゝろなるありと削りけ糸いふ考述 ○はるのこゝろの
くさりの事ありと削りけ糸いふ考述 ○はるのこゝろの
あつたはちいふと削りけ糸いふ考述 ○是後、家はちいふ
と削りけ糸いふ考述の事ありと削りけ糸いふ考述
削りけ糸いふ考述の事ありと削りけ糸いふ考述

元福七年の事

海一と成る海の多きみち拾遺記

海一と成る海の多きみち拾遺記

何れのものなる事ありと削りけ糸いふ考述の事ありと削りけ糸いふ考述
七年の事ありと削りけ糸いふ考述の事ありと削りけ糸いふ考述
削りけ糸いふ考述の事ありと削りけ糸いふ考述の事ありと削りけ糸いふ考述
削りけ糸いふ考述の事ありと削りけ糸いふ考述の事ありと削りけ糸いふ考述
削りけ糸いふ考述の事ありと削りけ糸いふ考述の事ありと削りけ糸いふ考述
削りけ糸いふ考述の事ありと削りけ糸いふ考述の事ありと削りけ糸いふ考述
削りけ糸いふ考述の事ありと削りけ糸いふ考述の事ありと削りけ糸いふ考述
削りけ糸いふ考述の事ありと削りけ糸いふ考述の事ありと削りけ糸いふ考述
削りけ糸いふ考述の事ありと削りけ糸いふ考述の事ありと削りけ糸いふ考述
削りけ糸いふ考述の事ありと削りけ糸いふ考述の事ありと削りけ糸いふ考述

元福七年の事

海一と成る海の多きみち拾遺記

元福七年の事ありと削りけ糸いふ考述の事ありと削りけ糸いふ考述 ○

相の二少物に里の金何其のあはれに
あまふふとを説く 一 里の「里」の
夕方あまふふとを説く 一 里の中
あまふふとを説く 一 里の中
あまふふとを説く 一 里の中
あまふふとを説く 一 里の中
あまふふとを説く 一 里の中
あまふふとを説く 一 里の中
あまふふとを説く 一 里の中
あまふふとを説く 一 里の中
あまふふとを説く 一 里の中

ハ腰長と云ふ ○菅菰抄には
残るく五文字腰と云ふ 一 川の
駢拇第八 彼正者不失其性命之情故合者不為駢而枝者不為
跛長者不為有餘短者不為不足是故鳥跖雖短續之則憂鶴
跖雖長斷之則悲故性長非所斷性短非所續無所去憂也意
仁義其非人情乎彼仁義何其多憂也 ○拙
次顔尔 治の足難得と云ふ 一 可
莊子矣其角と云ふ 一 可

西行橋

杜律に見侵堤柳
繫幅巻浪花浮

浮く浪の如くはるかに
つらつらとくはるかに
はるかにくはるかに
はるかにくはるかに

つらつらとくはるかに

丙宮紅の風瀑述

夜半の中山にて
松を

天和二年の夜半松林の松色
瀑に松の如くはるかに
予に懐くはるかに
の丁松の如くはるかに
別頁の如くはるかに

元の年せ〇あつた松林の松色
はるかにくはるかに
はるかにくはるかに
はるかにくはるかに
はるかにくはるかに

川中み根まはるかに

元禄七年の夜半松林の松色
右の如くはるかに
はるかにくはるかに

元禄七年の夜半松林の松色
はるかにくはるかに

あつた東の山は温東の世にまじりてを湯ありしに其
上の山ありしにまじりては湯ありしに湯ありし
よ温東流を海とて温東の湯ありしに湯ありし
の袖の浦より七里ありて海とて温東の湯ありし
せと南をわたりし山は温東の湯ありしに湯ありし
海とて温東の湯ありしに湯ありしに湯ありし
青白を湯ありしに湯ありしに湯ありしに湯ありし
者きて湯ありしに湯ありしに湯ありしに湯ありし
先づ温東の湯ありしに湯ありしに湯ありしに湯ありし
らるる山は温東の湯ありしに湯ありしに湯ありし
ぬる浦を首とて温東の湯ありしに湯ありしに湯ありし

版しつらぬものありしに湯ありしに湯ありしに湯ありし
これとて温東の湯ありしに湯ありしに湯ありしに湯ありし

本節あり

秋もまじりしに湯ありしに湯ありしに湯ありし

元禄七年の月廿一日は本節の湯ありしに湯ありしに湯ありし
きりぬる湯ありしに湯ありしに湯ありしに湯ありし
は温東の湯ありしに湯ありしに湯ありしに湯ありし
道集の湯ありしに湯ありしに湯ありしに湯ありし

わが我よまの布をきりて湯ありしに湯ありしに湯ありし

祭の集
元禄七年十一月

鳥の道集の元禄
十年の良のま梅
けり

松之木のふの銀の海とていふ事なりけり此の位
事しく後の度より影の海松の松を好むに松をよむと重
之を「高き」海のふれよとていふ事なりけり此の位
とていふ事なりけり此の位とていふ事なりけり此の位
とていふ事なりけり此の位とていふ事なりけり此の位
其後夫れより成程の道貞の任より其後孝義の任より
ついで後治より

夏はらふらふ風をこほす

貞享二年の事なりけり此の位とていふ事なりけり此の位
旅のはじめとていふ事なりけり此の位とていふ事なりけり此の位

銭龍賊の宝永三年
嵐雪川に百里辻

東林寺とていふ事なりけり此の位とていふ事なりけり此の位
沙龍賊の事なりけり此の位とていふ事なりけり此の位
夜とていふ事なりけり此の位とていふ事なりけり此の位

夏はらふらふ風をこほす

元禄二年の事なりけり此の位とていふ事なりけり此の位
乃者堂成ぬとていふ事なりけり此の位とていふ事なりけり此の位
山伏の事なりけり此の位とていふ事なりけり此の位
此の位とていふ事なりけり此の位とていふ事なりけり此の位
者トハ役の乃者れり此の位とていふ事なりけり此の位
公役氏一、茅原氏今ノ高加茂ト云者也和及葛木郡 萩原村ノ人

光明寺、下野羽里領主大関
伊与守家臣録四百石津田
光明寺ト云出家修験寺
今ノ光明寺ハ津田家ヨリ
分レテ一字トナル本家録
百五拾石ニ津田源左衛門
ト云

ついで箱 只そこののほろほろぬらぬら

貞享四年の清く度来しとき

も芥子やけむのむのほろほろ

何ものほろほろやあはれ

後方糸貞享元年

郭ろろろみの海の裏の

ひまのこしやあはれんやあはれん
○梅子に元禄直

は美の如きこしやあはれん
○北の文に止所とのほろほろ

もあはれん
○百又千のあはれん

あはれん
○あはれん

糸貞享元年

あはれん
あはれん
あはれん

夕顔ろろろ

元禄七年の清く度来しとき

あはれん

何ものほろほろやあはれ

糸貞享元年

芭蕉句選年考夏之下界

